

詩 篇

眞 理

岩 中 芳 國

「俺」の身體が腐敗して

腐敗した「俺」の身體に數萬の蟲が巢喰ふ

「俺」を組織してゐた「物質」は分解して

太古ながらの「彼等の自分」に歸つてゆく

「俺」を構成してゐた小さい「俺」は

憎める者愛する者の胸に忍び入り

あらゆる細胞を煽動して

生命の革命を夢見て哄笑する。

鑛 山 風 景

朝

生氣の無い勞働者はぞろ／＼と入り込んで俺の腦髓にツルハシを打込み
ガツ／＼と餓えた獸の様にかき集める

空虚になつた俺の頭に

石と土とをなげこんで

重いローラーを引き廻すのだ、そして

夕暮には

がら／＼とその上を荷馬車をひいて歸るのだ

自己燃焼から

一九三一・一二・二日

憂鬱なる墓標。

憂鬱なる圖書庫に溢るゝ

蒸す様な思想の渦巻に

閉ぢ込められた情熱が湧立つ。

眞理と眞理が互に闘争し

傷ける血潮は空間に逆り

世紀の斷層に浸潤する。

薄暗い圖書庫に充滿せる

憂鬱なる墓標の堆積!!